

令和4年6月定例会代表質問

- 1 本市の最近の人口動態について
- 2 ウィズ・コロナ時代における熱中症対策について
- 3 ペットボトル削減に向けた取組について
- 4 「給水」を切り口とした回遊性を高める取組について
- 5 甲府であることの誇りにについて
 - (1) ふるさと愛やシビックプライドについて

※ 今回は、全体を通しての質問構成を見ていただくため、市議会会議録からそのまま転載します。

(導入部分)

公明党を代表しまして質問させていただきます。昨年12月の定例会本会議から約半年ぶりに登壇の機会を与えていただきました。よろしくお願いいたします。

12月の定例会におきましては、テーマを「未来への投資」ということに絞って質問させていただきました。衆議院議員総選挙直後、持続可能性を確保するために、やはり未来への投資ということが一番重要ではないか、このような観点から質問を投げかけさせていただいたところです。国においては、こども家庭庁が来週の6月15日、会期末に法案が成立するという報道がされているところです。既に甲府市は、子ども未来応援条例、それから子ども未来部の設置と、このような先取りをしていると12月定例会で申し上げさせていただいたところです。そのときに、子どもを真ん中に置く政策を訴えたところでございます。

最近「子どもを真ん中に置く政策」というフレーズをこども家庭庁の議論の中で散見することができたところです。昨年の12月定例会で、この「未来への投資」ということから、高校3年生相当までの医療費の無償化の提言をさせていただきました。そのときに、市長さんの御英断によって実施のかじが切られた。で、本年度、令和4年度の一般会計予算に事業実施の予算が計上されているということで、本年3月定例会で審議をさせていただいたところでございます。本年度の当初予算については、一部の反対がございましたけれども、圧倒的多数で可決・成立したということでございます。

本定例会におきましては、対象年齢の拡大についての関係条例が議案第53号という形で提案をされていることは承知しております。その動向を注意深く、推移を見守っていきたいなと思っております。

今回も、1つのテーマに沿って質問を展開したいなと考えております。今回取り上げるテーマは後ほど明らかになるかと思いますが、まずそのイントロダクションという意味で最初の質問を取り上げていきたいと思っております。

Q1 本市の最近の人口動態について

新型コロナウイルス蔓延以前においては、日本全体が人口減少に向かう中、地方都市は相変わらず大都市圏への人口流出という共通した課題にあえいでいたものと言えます。本市もその例に漏れず、進学や就職を契機とした東京への人材の流出に何とか歯止めをかけるべく、様々な知恵を振り絞り、考え得るあらゆる手だてを講じてきたと思います。

私自身もこれまで、若者が戻ってきたくなるようなまちづくり、住んでよかったと思えるまちづくりをという点から、市内居住を条件とした奨学金返還支援や、甲府に関わる人材の創出という観点からの関係人口の提言、ふるさと愛の醸成を意識した青少年の健全育成など、ふるさと甲府が全国の中で選び取られることを願って様々な提言をさせていただきました。何と云っても、同様の課題を抱える多くの地方都市の中からあえて甲府を選ぶということには、それなりの強い動機が必要であることは言うまでもありません。ふるさと愛の醸成とか甲府の魅力の磨き上げといった、これまであまり言われてこなかった側面に焦点が当てられるようになってきたのも、甲府に住みたい、関わりを持ちたい、応援したいというマインドに働きかけることがより重要と認識されてきたものと言えます。

こうした状況において、2019年末から全世界を覆った新型コロナウイルスは、これまで本議会で指摘してきましたように、我々のライフスタイルに大きな変革をもたらしました。ビジネスライフからいえば、人との接触を極力減らすという要請はテレワークの急速な進展を促し、このことは、あえて東京にいなくても仕事ができるという、地方での暮らしを見直すコペルニクス的とも言えるべき大きな転換点となりました。

以前、定例会本会議で、長い間の東京一極集中により東京圏への人材の供給源の地位へ追いやられてきた地方にとって、人材を奪い返す千載一遇のチャンスとあえて申し上げたのも、まさに、地方にとってコロナ禍をきっかけとして大きな追い風が吹いているという意味からです。

こうした中、2021年の住民基本台帳人口移動報告によれば、都道府県別転出入の状況のうち、転入者数は35道府県で増加、対前年増減率は山梨県が最も増加しており、本市も435人転入超過という注目すべき結果となっています。この報道を目にしたとき、思わず小躍りいたしました。まさに、これまで念願してきたことが数字となって具体的に表れたことに感慨深いものを感じるとともに、一方で、これを一過性に終わらせてはいけないと強く思っております。その要因を分析し、引き続きの施策展開につなげていくことが重要です。

そこで、この転入超過の状況をどのように捉えているのか、当局の認識をお伺いするとともに、今後この傾向を持続させるためにどのように取り組んでいかれるのか、お伺いいたします。

A 1 樋口雄一市長

兵道議員の代表質問にお答えいたします。

近年の人口動態についてでございます。

人口減少や少子高齢化は、地域における担い手の減少により、これまで地域のコミュニティが果たしてきた自治会や消防団の活動などの低下を招くとともに、生産年齢人口の減少による経済規模の縮小や地域活力の衰退、さらには税収入等の落ち込みによる安定的な行政サービスの提供が困難となるなど、その影響は多岐にわたるものと考えております。

このような状況に陥ることのないよう、人口減少や少子高齢化を本市の最重要課題であると捉え、就職を機とした若者の東京圏への転出傾向や、東京圏に住む女性のU I J ターンの動きが弱いといった傾向などを本市の課題として明らかにする中で、令和2年3月に第二期となる甲府市総合戦略を策定し、4つの基本目標に位置づけた様々な施策の展開に積極的に取り組んでまいりました。

こうした中、本市のこれまでの取組が実を結び始め、また、近年の新型コロナウイルス感染症の拡大による地方移住への関心の高まりや、人々の価値観の多様化、デジタル化の加速

によるテレワークの浸透などの社会変化も相まって、感染症の拡大前と比べ、10歳代・20歳代の転入の増加や、東京圏への転出の抑制が図られるとともに、30歳代・40歳代の子育て世帯、中でも30歳代前半の転出が10%を超える減少となるなど、ここ数年の本市の人口動態は転入超過へと転じております。

このような流れを止めることのないよう、こうふコンシェルジュによる移住希望者に寄り添ったきめ細かな移住相談や、県外に通勤・通学する方の定期券購入助成などに取り組む中で、施策のさらなる充実に向け、移住に要する経済的負担を軽減する移住支援金の拡充を行うとともに、新婚世帯を対象に住居費や引越費用などを支援する結婚新生活支援事業を来月より実施いたします。

また、すこやか子育て医療費助成事業の対象者の拡充などによる切れ目のない子育て・子育て施策の推進や、健康都市の実現に向け、疾病や障がいの有無に関わらず、子どもから高齢者まで全ての皆様の健康づくりの推進に取り組むとともに、日本女性会議を踏まえた女性活躍の加速や、災害に強い安全・安心なまちづくりに向けた地域防災力のさらなる向上、本市が有する四季折々の魅力あふれるイベントを活用した地域経済の活性化や、都市計画道路などの都市基盤の整備、さらにはGIGAスクール構想の推進による教育環境の充実など、引き続き市民の皆様の暮らしに直結する取組の一層の推進を図ってまいります。

また、本市は、緑豊かな自然を持つ一方で、山梨県の政治、経済、文化の中心地として発展を遂げるなど、他市に誇れる魅力を有したまちであります。こうした本市の魅力をより高めるため、新たな都市観光の拠点として、甲府城周辺における小江戸情緒が漂う空間づくりや、遊亀公園及び附属動物園の整備を進め、まちなかエリアの一体的な交流とにぎわいの創出を図るとともに、未来産業なども見据えた企業立地の促進など、リニア開業と、さらにその先の将来を見据えたまちづくりに向けて取り組んでまいります。

加えて、こうふ開府500年記念事業を通じて、多くの市民の皆様の心に育まれたふるさとを愛する気持ちは、いつまでも心の中に生き続け、定住のみならず、若者など一度甲府を

離れた方が再び本市に戻る要因になり得るとともに、ふるさと納税や、都市部と地方を行き来する二地域居住など、様々な形で、生涯を通じて本市と特別な関わりを持つことにつながるものと期待しているところでございます。

今後におきましても、人口減少対策は、将来を見据えた中長期的な視点を持って取り組むことが肝要であると考えておりますので、短期的な成果に一喜一憂することなく、人口減少のさらなる抑制に向け、明るい未来を創造する、時勢に応じた多角的かつ効果的な事業の展開に取り組んでまいりたいと考えております。

引き続きまして、よろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

(答弁を受けて)

樋口市長から本当に事細かく御説明をしていただいて、私も全くそのとおりだなと思うところです。多くの施策展開に甲府市が取り組んでいるという状況が見てとれたところです。そうした取組が実を結び始めていると。まさにそのとおりでございまして、翻って私自身を考えた場合に、私のこれまで申し上げてきたことが徐々に、少しでも実を結び始めているのかなと、市長の答弁をお聞きして改めて実感させていただいたところでございます。

この流れをやっぱり一過性に止めてはいけないと。本当に、それには甲府の魅力のさらなる磨き上げが必要ですし、それに携わる我々もさらに一層、甲府の魅力を語っていかなければいけないと、今の御答弁をお聞きして改めて決意をさせていただいたところでございます。

いろいろなヒントをいただいたところです。先ほど、こうふコンシェルジュを取り上げていただきました。私も非常にリスペクトさせていただいているところでございます。私の信条は、こうした甲府の魅力を自由自在、縦横無尽に語れるような人材が、やっぱり甲府にとって必要ではないかなと。私は、そうしたおもてなしのガイドみたいな養成も将来していっ

たらどうかかと、4期目を迎えるときにそんなことを思ったところです。いずれ機会があったら取り上げていきたいなと思っています。

さらに、やっぱり何といってもこうふ開府500年。これは非常に大変な事業でございましたけれども、やり終えた今となつては、皆様方の心に大きな財産を残したのではないかなと改めて思うところでございます。様々御苦勞いただいた関係の皆様、改めて、この場をお借りして感謝申し上げたいと思いますと同時に、このレガシーを次の時代にしっかり受け継いでいこうと、改めて私どもも微力ながらお手伝いをさせていただきたいと思っています。

甲府が転入超過という状況になったのは、やはり多くの方が甲府に行ってみたい、甲府に住んでみたい、甲府を選んでくれたと。あえて甲府市を選んだと。このことは非常に重要なファクターになっていると思います。そのファクターはいろいろ分析は可能だと思っていますけれども、要は甲府が面白いと。甲府はいいところだから、単純に、そこに住みたいと。こういったこともひとつ大きな要因となっているのではないかなと。そうしたマインドに背中を押してあげる、これが我々の役目ではないかなと、今の御答弁をお聞きして改めて思っている次第でございます。

そして、甲府の魅力を語っていこうと。新たな魅力もつくっていかなければいけない。そうしたところで、徐々にテーマに近づいた質問を次にさせていただきます。

Q2 ウィズ・コロナ時代における熱中症対策について

近年、ヒートアイランド現象や地球温暖化などの影響によって、熱中症のリスクが年々高まっているところです。熱中症は子どもや高齢者の発症が多く、屋外だけでなく屋内でも発生しております。熱中症により室内で倒れていた独り暮らしの高齢者が、配食ボランティアの声かけによって発見され、救急搬送されて一命を取り留めたという事例が、かつて私が住んでおりました貢川団地でありました。

総務省消防庁の調べによりますと、夏季の全国熱中症搬送者数は、2010年以降高止まり傾向にあり、特に2018年の9万5,000人強をピークに、以後の2年間は若干減少したものの、6万人を超える患者が救急搬送されております。そこへ新型コロナウイルス感染防止のためにマスクの着用が要請されたことにより、いわゆるマスク熱中症のリスクが高まっていることが指摘されております。

マスク着用により、喉の渇きを感じにくくなる、吐く息の温度は体温とほぼ同じ36度になり、体内に熱が籠もりやすくなる、呼吸しづらく心拍数が上がり体力が消耗するなど、マスク熱中症が心配される状況にあります。これから暑い季節が到来し、また台風シーズンもやってまいります。心配されるのは、運動会の練習や部活動などでの子どもたちの熱中症のリスクであり、また水害を避けるための避難所での熱中症のリスクです。小まめな水分補給、特に5度から15度の冷水が直腸温の上昇を抑え、体温を下げることで、熱中症予防のために効果的と耳にしたことがあります。

そこで、学校現場における子どもたちの熱中症対策についてまずお伺いするとともに、当分の間マスク着用が常態化することが予想される今後の避難所生活では、熱中症予防もこれまで以上に考慮する必要があると考えますが、どのような対策を講じていくのか、お考えをお伺いいたします。

A 2－1 数野教育長

学校現場における子どもたちの熱中症対策についてお答えいたします。

文部科学省によれば、昨年度の学校管理下での熱中症は全国で2, 549件発生しており、気候変動の影響を考慮すると、今後も災害級ともいえる暑さが懸念され、学校における総合的な熱中症対策が求められております。

こうした中、本市教育委員会では、予防策として各校に、小まめな水分補給や運動強度の調節、適宜の休憩、暑さ指数に基づいた授業や行事の適切な実施判断を求めるとともに、熱中症警戒アラート発表時においては、下校時刻を遅らせる等、予防行動を取るよう指導しております。

また、コロナ禍において、マスクの着用は熱中症のリスクを高めることから、先日、文部科学省より山梨県教育委員会を通じて、体育の授業等においては、身体的距離を十分に確保した上でマスクを外すことや、夏場においては、人と十分な距離を確保し会話を控えた上で、登下校時にマスクを外すよう指導すること等について通知があり、改めて今月の定例校長会でもこれらのことを徹底するよう指導したところであります。

さらに、施設・設備面では、全普通教室における冷暖房設備に加え、昨年度より、校舎の高層階等での活用を図るためのスポットクーラーを各校に配備しているところであります。

熱中症発生時の対応につきましては、各校において、校内連絡体制の確保や応急処置、救急車要請の判断、保護者への連絡、職員の役割分担等について確認するとともに、職員を対象とした応急手当てや救命処置等に関する講習も行っております。

今後におきましても、熱中症の未然防止と発生時の迅速な対応など総合的な対策を進め、児童・生徒が安全・安心に学ぶことのできる環境づくりに努めてまいります。

以上でございます。

A 2－2 佐野危機管理監

避難所生活での熱中症対策についてお答えいたします。

夏季の避難所生活におきましては、施設内の気温や湿度が上昇しやすくなることに加え、マスク着用により、熱中症を発症するおそれが高まることから、熱中症に対する注意喚起や適切な室内温度を保つための環境整備など、健康面に配慮した予防対策を行うことが重要であります。

こうした中、本市においては、災害時における協定を様々な企業などと締結し、避難所生活を送る施設内の空気を対流させる大型扇風機のリースや、飲料水の冷却などに活用できる氷の供給による暑さ対策を行う中で、熱中症のリスク低減に備えているところであります。

また、常駐している地域連絡員や避難所運営委員が連携を図る中で、非常用貯水槽などの備蓄飲料水を活用し、小まめに水分を補給するよう働きかけるとともに、施設内の気温や湿度に注意し、熱中症の危険性について注意喚起を行ってまいります。

なお、体力面で支障が生じるおそれのある高齢者や妊産婦等につきましては、エアコンが設置されている学校の教室などを活用するとともに、熱中症の症状が疑われる方には、本市保健所と連携を図り、応急処置や救急車の要請など適切に対応してまいります。

以上でございます。

(答弁を受けて)

熱中症対策は今、一方では感染症予防ということもあわせて、非常に難しいかじ取りの状況だと思えます。学校現場におきましては、近々文部科学省も通知を出すということ、また、避難所におきましては、業者との協定によって氷の確保ということで、温度管理の面は心配ないかなと思っています。あとは、そうした温度管理とともに、水ということも非常に大きなファクターになってくるような気がいたします。

Q3 ペットボトル削減に向けた取組について

3番目の質問に移りたいと思います。

ペットボトル削減に向けた取組についてお伺いをさせていただきます。

近年、海洋プラスチックごみ問題、気候変動問題、諸外国の廃棄物輸入規制強化などへの対応を契機として、国内におけるプラスチック資源循環を一層促進する重要性が高まっております。国は、プラスチック使用製品の設計から廃棄物処理に至るまでのライフサイクル全般で、あらゆる主体における包括的なプラスチック資源循環の取組「3R+Renewable」を促進する措置を講じるため「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」を本年4月1日に施行いたしました。

その一番の目玉は、プラスチックについて、単に捨てる量を減らすことだけではなく、捨てることを前提としない経済活動をすることを目指しているという点です。かつての大量生産、大量消費、大量廃棄といった在り方を根本的に転換し、そもそも捨ててしまうようなものをつくらない、使わないといったライフスタイルを目指すという考え方だと思います。

法律施行の背景には、言うまでもなく、近年世界規模で注目され、SDGsの14番目の目標にも該当する、海洋プラスチック問題があります。使用後廃棄されたプラスチックが適正に処理されないと、海へ流出し、プラスチックごみとして漂流します。プラスチックは分解速度が遅く、マイクロプラスチックと呼ばれる5ミリメートル以下のサイズになった後は、数百年間自然分解せずに残ると予測されているほどです。その結果、プラスチックごみによる海洋汚染が世界規模で広がったのが、海洋プラスチック問題です。

法律の施行により、自分専用のフォーク、ナイフ、スプーンなどの器具、いわゆるマイカトラリーの普及が進むことが予想されます。こうした流れ、特に捨てることを前提としない経済活動を推し進め、ゼロカーボンシティの実現、SDGsの達成を目指す上からは、私はペットボトル削減に向けた取組を今後進めていくべきと考えます。

日本で年間消費されるペットボトルは約245億本。そのうち、約35億本ものペットボトルがリサイクル回収されず、燃えるごみまたは不燃ごみとされ、中には不法投棄等によって海に流れ着き、海洋ごみとなると言われております。

ペットボトルは、リサイクルの象徴のようにこれまで捉えられてきましたが、実態を見ると、必ずしも手放して喜べない状況にあります。245億本ものペットボトルを生産するのにどれだけの二酸化炭素が排出されるか、考えただけでも気が遠くなる思いです。

最近、ウォーキングや散歩など外出の折にマイボトルに自分好みの飲料を詰め持ち歩くといった光景を目にすることが多くなりました。朝の登校見守りの際に目にする、体ほどの水筒をぶら下げて登校する児童の姿も日常的風景となっております。新型コロナを乗り越え、ようやく外に出ようという機運が高まっているこの時期に、マイボトルを持って外に出かけようという呼びかけをして、その背中を押してあげることも、ペットボトル削減による脱炭素社会実現に向けた一翼を担っているという当事者意識の醸成という意味でも、ぜひ取組を進めるべきだと思います。

そこで、いわゆるプラスチック資源循環促進法の施行を契機として、マイボトル使用を訴えるなど、ペットボトル削減に向けた取組について当局の考えをお伺いいたします。

A3 神宮寺環境部長

ペットボトル削減に向けた取組についてお答えいたします。

近年地球規模で広がる深刻な海洋汚染の原因となるペットボトルを含むプラスチックごみを削減するため、国ではこれまでの、リデュース（発生抑制）、リユース（再使用）、リサイクル（再生利用）の3Rにリニューアブル（再生可能資源の選択）を加えたものを基本原則とする「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」を施行し、さらなるプラスチックの資源循環を目指しております。

こうした中、本市におきましては、昨年2月のゼロカーボンシティの表明を機に、脱炭素の実現に向けた新たなリサイクルに取り組むため、株式会社サントリーと協定を締結し、本年4月から、使用済みペットボトルを他の製品にリサイクルするのではなく、ペットボトルとして再生利用する水平リサイクルを始めたところであります。この取組では、石油由来の原料を使用したペットボトルの製造を削減させるほか、CO₂の排出量についても、新たな製造に比べ60%以上削減できると見込まれております。

また「毎年7月は、使い捨てプラスチックを使うのをやめよう」を合い言葉とする世界的な環境保護イベントであるプラスチック・フリー・ジュライや、環境省がプラスチックとの賢い付き合い方を全国的に推進するプラスチックスマートの甲府市版として、甲府市プラスチック・スマートキャンペーンを7月に実施する予定であります。このイベントでは、ヴァンフォーレ甲府や山梨県、NPO団体と連携し、脱プラスチックへのチャレンジを実施していただくとともに、プラスチック問題に関するパネル展において、再生可能資源製品の紹介や、マイボトル等の使用についても普及啓発してまいります。

今後におきましても、脱炭素への課題提起や、マイボトル、マイバックなどの使用による脱プラスチックを促し、持続可能な循環型社会の実現に向け取り組んでまいります。

以上でございます。

(答弁を受けて)

株式会社サントリーと協定を結んで、新たなペットボトルはできるだけ使用しないといったようなことだと思います。ペットボトルの削減に向けて、もう世界的な規模で取り組んでいかなければいけないかなと思っています。でも、その一歩は我々一人一人の力、市民の方の一人一人のお力をお借りしないと、やはり実現できないかなと。ライフスタイルの変革というのは非常に大きなエネルギー、考え方の転換が必要になってくるかと思っておりますけれども、地球環境のことを考えると、1人でも多くの方が、捨てることを前提としない経済活動に御理解をいただく、これが非常に重要ではないかなと改めて思っているところでございます。

これから、マイボトルを持って外へ出ようと、もうコロナ禍も打ち破って外へ出るその背中を押すときに、マイボトルを持ってみんなで外へ行こうねと、このような市民運動も可能になってくるのではないかなと思います。外へ出たくてうずうずしている方がかなり多くいらっしゃると思います。そういった方々に、じゃあマイボトルを持って外へ出ましょうよということも、一つ、いいかなと思います。その意味で、それが最終的にはペットボトルの削減、プラスチックの削減につながるのかなと思っておりますので、ぜひとも取組を、後押しをよろしくお願いいたします。

こういったことを踏まえて、4番目の、給水を切り口とした回遊性を高める取組についてという質問を投げかけたいと思います。

Q4 「給水」を切り口とした回遊性を高める取組について

先ほど来からの、熱中症対策とSDGsを意識した廃プラ削減のためのマイボトル持参の外出の勧めは、モンドセレクション最高金賞受賞のおいしい水道水という甲府の貴重なブランド資源に、より一層つないでいくための伏線として述べたものでございます。

水筒持参がスタイルとして定着している学校現場の現状を見るにつけ、水筒の水を飲み終わってまだまだ水が足りないといったときに、その補給はどうするんだろうかという素朴な疑問に行き着きます。熱中症対策からいえば、夏場の水道水そのままでは誰も進んで飲もうとしないのではないだろうかということです。また、外出時にマイボトル持参というライフスタイルが次第に広がりつつある中で、一息つける場所に給水できるチャンスがあれば、マイボトルライフがより一層魅力あるものになり、外出意欲を駆り立てると思います。

マラソンの給水所のように、まちなかに自由に給水するスポットがあれば、まちなかを歩いてみようかという意識を後押しできるのではないかと思います。実際に、こうした考えから、まちなかに給水スポットを設置する自治体も現れています。その際、自分の地域の水道水を使ってアピールしているところもあります。滋賀県の大津市では、琵琶湖を水源とする水道水を使って、新たに整備した公園に給水スポットを設置し、そのPR動画を配信した結果、マイボトル持参の多くの市民でにぎわっているそうです。

翻って本市について考えてみますと、日本遺産甲州の匠の源流・御嶽昇仙峡があり、また、甲府城南側やリニューアルオープンした遊亀公園、それに、今秋からリニューアル工事に入る附属動物園があります。こうした場所は、当然歩き回ることが予定されている資源です。回遊性がこうした資源の生命線であると言えます。回遊性を高めるということは、車第一のこれまでのライフスタイルを脱炭素という観点から見直す上で重要な視点であり、取りも直さず、歩いて甲府を楽しむ、歩いて甲府のよさを再発見するということにもつながると思います。

こうした回遊性は、マイボトル持参という新しいライフスタイルと連動することによって、究極には、意識せずとも地球温暖化防止の取組に資する結果となります。回遊の途中で「甲府のおいしい水道水」を提供するスポットを設けることによって、熱中症対策とともに甲府の水のよさを再発見するきっかけとなり得ると思います。例えば昇仙峡やリニューアル後の遊亀公園及び附属動物園に給水スポットを設置するなど、甲府城からの回遊コースとして提示していく。新たな甲府の魅力となる可能性を秘めていると思います。

そこでまず、観光資源であります日本遺産甲州の匠の源流・御嶽昇仙峡、甲府城から遊亀公園及び附属動物園までの回遊コースなどにおいて、どのような回遊性を高める取組を行っているのか、お伺いします。また、こうした回遊コースへの給水スポットの設置について、どのように考えておられるのか、お伺いいたします。

A 4－1 桜林産業部長

御嶽昇仙峡などにおける回遊性を高める取組についての御質問にお答えいたします。

市内観光地やまちなかの拠点施設を歩いて回遊することは、環境負荷の低減のみならず、市内での滞留時間の増加による経済的な効果や拠点施設間の魅力の再発見にもつながりますことから、回遊性を高める視点はまちづくりにおいて欠かすことのできない重要な要素であります。

御質問の本市の回遊性を高める取組において、まず、御嶽昇仙峡エリアにつきましては、市内観光地の回遊促進を図るスタンプラリーイベントのスポットを御嶽昇仙峡エリア内にも複数か所設置し、観光施設を歩いて巡るよう促すとともに、日本遺産関連事業として、ガイドとともに溪谷沿いを歩きながら学ぶ市民向け講座を開催するなど、歩いて楽しむことができる御嶽昇仙峡の魅力の発信に努めております。

次に、甲府城と遊亀公園及び附属動物園を含むエリアにつきましては、魅力の向上と多様

な交流によるにぎわいの創出を図るため、甲府城南側や遊亀公園などの整備に取り組んでいるところであります。現在、甲府城南側において散策路整備を進めるとともに、本年度からは、市道春日本通り線、通称春日あべにゅうの整備に着手し、遊亀公園及び附属動物園においては令和2年度から再整備に取り組んでおり、本年4月には公園の一部リニューアルオープンをしたところであります。このことにより、甲府城からオリオン通り、春日あべにゅうへとつながる中心街の南北の骨格となる動線が形成されるため、甲府城と遊亀公園及び附属動物園というにぎわいと交流の拠点がより強力に結ばれ、回遊性の向上が期待できると考えております。

こうした拠点等の整備による回遊性向上への取組に加え、今年度新たに、山のぼり・まち歩き促進事業として、スマートフォンアプリを活用したデジタルスタンプラリーを実施することとしており、御嶽昇仙峡はもとより、甲府名山やまちなかの観光スポットなどの回遊促進につなげてまいります。

今後におきましても、市民の皆様や来訪者が、歩きたい、また訪れたいと思っていただけるよう、楽しみながら安全・快適に回遊できるまちづくりに取り組んでまいります。

以上でございます。

A 4 - 2 上田上下水道業務部長

回遊コースへの給水スポットの設置についての御質問にお答えいたします。

本市におきましては「甲府のおいしい水道水」をPRすることを目的として、年度内を目途に平瀬浄水場へ、つくりたての水道水が飲める給水スポットの設置を進めており、さらに来年度以降、その操作性等を検証する中で、観光施設等への活用を検討することとしております。

御質問の観光資源である御嶽昇仙峡や回遊コースへの給水スポットの設置につきましては「甲府のおいしい水道水」のPRに加え、マイボトルによるペットボトルの削減や熱中症対

策に貢献するとともに、観光客や市民の皆様が歩いて甲府のよさを発見する機会となることが期待されますことから、関係部局と協議し、設置に向けた検討をしてまいります。

今後におきましても、関係部局と連携し、SDGsの推進等様々な施策の目標達成に努める中で「甲府のおいしい水道水」のPRを図ってまいります。

以上でございます。

(答弁を受けて)

回遊性を高める取組に前向きに取り組んでいらっしゃる。新規事業として、山のぼり・まち歩きの促進を事業として行っていくといったような御答弁をいただきました。

こうした、歩いて甲府を回るといったことにセットで、先ほど上田上下水道局業務部長から御答弁いただきましたけれども、給水スポットを置くことによって、非常に回遊性も高まるのではないかと、単純に私はそう思っているところでございます。本当に、歩いている途中で一休みしたいなというときに、目の前においしい水がある、オアシスがあると、思わず飛びついてしまうんじゃないかなということが容易に想像できると思います。また、それを目当てに、じゃあ歩いてみようかといった方々もこれから増えてくるのではないかなと思います。

歩いて回るということを言えば、かつてスローライフということが一世を風靡した時期がございました。これまで何かと急ぎ急ぎといったライフスタイルを、ゆっくりとかみしめながら生きていくといったような意味で、スローライフということが言われた時期がございました。食事もスローフードといったようなことでかつて言われたことがあります。この回遊性ということを考えたときに、こうしたスローライフという生き方が再び私の脳裏をよぎったところでございます。

健康都市甲府ですから、歩いて甲府のよさ、そして歩くことによって自然に自分の健康も保持されるといったようなことで、相乗効果が生まれるのではないかなと。給水を切り口と

した回遊性については、やはり部局相互の連携が重要になってくると思いますので、部局横断的にぜひ取組を進めていっていただきたいなと要望しまして、最後の、甲府であることの誇りについてという質問に移りたいと思います。

Q5 甲府であることの誇りについて

これまでの今回の質問のまとめの意味で、甲府に住んでよかった、甲府市民でよかったと思えるようなまちづくりについて議論をしていきたいと思います。

先ほどの給水スポットは、甲府の水を使いながら新たな魅力の発掘という観点での提案です。面白い取組があるといったことが口コミでも人々の口の端に上るようになれば、甲府に住んでいる我々も素朴に鼻が高い。今まで当たり前のように思っていた資源も第三者的な目から見ると価値のあるものに映ることは、まちづくりの世界ではよく言われるところです。有名な「若者、ばか者、よそ者」という新たな視点を与えてくれる存在の力を借りながら、資源の磨き上げや付加価値化していくことは、あれもない、これもないといった、ないものねだりの考えから脱却して、あれがある、これがあるという、あるもの探しの考え方にシフトしていくことにつながります。

その根底にあるのは、最近よく言われるところのシビックプライドであり、ふるさと愛だと私は思います。冒頭の質問で、若者が戻ってきたくなるようなまちに、住んでよかったと思えるまちにという、初当選以来の思いを述べさせていただきましたけれども、それは、ふるさと甲府に対する愛着心がなせるわざであり、その愛着心は、こんな面白い大人がいるとか、こんなすごいところがあるといった、ほかの人に紹介したい、自慢したいという心の裏返しのような気がします。最近ようやく、ふるさと愛やシビックプライドといった、ある面エモーショナルなものが市民権を得た感があり、今後、まさに大きなキーワードになると思います。

そこで、改めて、こうしたふるさと愛やシビックプライドについて、その必要性をどのように捉えているのか、また、それらを高めていくためにどのように取り組まれるのか、市長の考えをお伺いいたします。

A 5 樋口雄一市長

甲府であることの誇りについての御質問にお答えいたします。

私は、市長就任以来、ふるさと甲府の限りない発展に向け、市民のあふれる笑顔とまちの元気・活力づくりにつなげるため、大きな甲府愛と甲府市民である誇りを胸に、全力で市政運営に取り組んでいるところであります。こうした甲府への愛着と甲府市民であることへの誇り、いわゆるシビックプライドを持ち、それを醸成することは、このまちをよくしようとするまちづくりの原点として必要不可欠であり、未来に向けた大きな原動力になるものと考えております。

こうした考えのもと、これまで様々な事業を通して、シビックプライドの醸成につながる機会を創出してまいりました。とりわけ、6年間にわたり開催してきたこうふ開府500年記念事業は、多くの皆様の参画と御支援・御協力を賜る中、成功裏に終えることができ、改めて市民の皆様のふるさと甲府への愛着を深めることができたと考えております。

こうした成果を一過性に終わらせることがないように、この記念事業を契機に育まれた甲府ラーニング・スピーチ、私の地域・歴史探訪、こうふドリームキャンパスを、こうふ開府500年レガシー事業として今年度も引き続き実施しており、あわせて日本記念日協会へ登録した12月20日「こうふ開府の日」を、多くの市民の皆様に、甲府のまちが誕生した原点の日と認識していただき、愛される記念日として成長していけるよう、取り組んでまいりたいと考えております。

また、本市には、宝石のまち甲府と呼ばれるジュエリー産業や、日本遺産である甲州の匠

の源流・御嶽昇仙峡、加えて甲府らしさを有する特産品の甲府之証など、国内外に誇れる魅力あふれる地域資源があります。こうした地域資源をさらに磨き上げ、それらを活用した事業の推進とともに、効果的なプロモーションを展開する中で、甲府のまちのブランド力の向上による市民の大きな誇りにつなげてまいりたいと考えております。

今後におきましても、この甲府市に住んでよかった、甲府市民でよかったと思っていただけるよう、市民の皆様とともに、シビックプライドを高めながら、市政の推進に邁進してまいります。よろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

(結語)

最後、締めくくりに市長の想いを語っていただきました。本当にありがとうございます。先ほど、市長の御答弁の中に、甲府にもいろいろな地域資源があるということ。まさにそのとおりだと思います。これをいかに磨き上げをかけ、よその人に甲府はこんなにいいところだといかに知ってもらおうかということだと思います。そうした取組によって、次第に私ども市民一人一人が、甲府市民であってよかったなというふうに思えるのではないかと、改めて思ったところでございます。

今回この質問をする1つのきっかけとなったのが、実は、ある人とひよんなきっかけで知り合いになった。その方は甲府生まれではない。外国人の方です。ひよんなことから知り合いにならせていただいて、お話をお伺いしたら、今、下帯那町で一生懸命、移住で頑張っておられると。クラフトビールをつくるということで、マスコミにも何回か登場されたデイビッドさんという方なんですけれども、ひよんなきっかけで知り合うことができました。

お話をお伺いする中で、その方がなぜ甲府に来たのかなと、私が素朴に思いました。帯那地区のこの美しい自然に引かれたんだと。これは自分の生まれ育ったところと本当に同じようなところで、ぜひ、住むんだったらここに住もうと。御案内のとおり、高齢化率が非常に

高いということもあって、じゃあ子どもを連れてくるかと。子どもを育てられるような方を何人か連れてくるよと、そういったようなことも話をされていたところです。

それを見ますと、甲府外の方がわざわざ甲府に来て、そのようなことをおっしゃっていた。しかも、地域の課題について自分たちで何とか課題解決のお力添えをしたいと、このような思いを熱く語っておられた姿に、やっぱりこれは私どもの考えと非常に近いということで、今回このような形で、徐々に新しい甲府の魅力をつくりながら、最後には甲府のシビックプライドあるいはふるさと愛につなげるような、ちょっと質問の仕方を考えてみようかなということで、ちょっと回りくどいやり方でしたけれども、給水スポットということを使いながら、新たな甲府の魅力発掘を一方でしながら、一生懸命甲府のために頑張っておられる方々にエールを送りたいなと思ひまして、今回このような質問をさせていただいたところです。

若者たちが戻ってくる1つの大きなきっかけというのは、やはり、何かの挫折したとかそういったときに、ふるさと甲府を思い出すと。その背中を押してあげるのは、やはり、小さい頃からふるさとで育ってきたといったような、ふるさとに対する愛着心じゃないかなと改めて思って、今回このような質問をさせていただいたところです。

まだまだ探せば幾らでも資源がある。これをいかに次の世代のために磨き上げていくのかということ、改めて、お互いに考えていきたいなと思います。また何かの質問の機会をいただきましたら、今度は、甲府の魅力を思いっきり語れるような人材について議論していきたいなと思っています。またしっかり勉強して、機会があれば登壇させていただきたいと思ひまして、以上で私の代表質問を閉じさせていただきたいと思ひます。